

東方文化連盟

——一九三〇年代大阪のアジア主義——

滝口剛

はじめに

- 一 東方文化連盟の発足
 - 二 日中戦争までの活動
 - 三 日中戦争期の活動
- おわりに

はじめに

本稿は、「東方文化連盟」の活動によって、一九三〇年代大阪におけるアジア主義の一端を明らかにするものである。

東方文化連盟は、一九三一年末「東方諸民族の理解と親和を計る」（規約）ことを目的として、大阪の財界・新聞関係者を背景に組織された。講演会やアジアとの国際交流に力を入れ、管見の限りでは『東方文化聯盟会報』

（以下『会報』一〇三号、『東方文化聯盟会誌』（以下『会誌』）四号〜一九号を一九四一年まで発行している。これらの資料は一九三〇年代大阪における財界、文化、新聞界のアジア主義を知るための格好の材料である。

東方文化連盟に関する研究としては、陶徳民によるものがある。同氏の研究は、連盟成立過程の紹介と内藤湖南との関連に焦点が当てられている。⁽¹⁾しかし、「文化」団体を標榜したとはいえ、東方文化連盟の活動は同時代の外交、大陸政策と関連しており、この観点からさらに究明する余地がある。また日中戦争以後についてはほとんど言及されて居らず、本稿ではこの点も紹介することとする。

また大阪の財界人とアジア主義については、松浦正孝を始めとした研究が言及しているが、⁽²⁾東方文化連盟の動向を明らかにすることによって、大アジア主義とは異なったアジア主義の存在を明らかにすることができるであろう。本稿では、当初は比較的穏健なアジア主義を基調としていた東方文化連盟が日中戦争以後次第に大東亜共栄圏への道を歩む経緯を明らかにする。

一 東方文化連盟の発足

規約によれば、東方文化連盟は、事務所を大阪に置き、「各種の事業を計画し遂行する」ための理事若干名、「理事会の協議に参加」する評議員若干名を置き、経費は会費（一カ年五円）と寄付によることになっていた。

まず東方文化連盟の主導的人物を理事によって見てみる。発足当初の理事は、岩井勝次郎（岩井商店創業者）、末広重雄（国際法学者、京都大学教授）、神尾茂（大阪朝日新聞記者）、内藤湖南（東洋史家、元京都帝国大学教授）、栗本勇之介（栗本鉄工社主）、平川清風（大阪毎日新聞記者）、佐多愛彦（元大阪医科大学長）、村田省蔵（大阪商船副社長）、清水銀蔵（代議士）、森平兵衛（大阪商工会議所評議員）である。⁽³⁾

すべて大阪に由縁のある人物であり、文化人（末広、内藤、佐多）、新聞関係者（神尾、平川）、財界人（岩井、栗本、村田、森）、政治家（清水）に分類される。

この中でも、清水、内藤、佐多が東方文化連盟の発起を主導しており、特に清水が中心人物であった。連盟の設立を主導した清水銀蔵は、犬養毅に師事した滋賀県選出の政友会代議士である。清水は、東京専門学校を卒業後、愛国生命保険などを経て、第一五回衆議院補欠選挙（一九二四年）に革新倶楽部から立候補して当選し、所属政党の合同により政友会に移った。清水は大陸に関心を持ち、「日露戦争直後に朝鮮及び満州の視察をなし、大正八年には北満、南支の視察を試み、更に昭和四年には孫逸仙の慰霊祭に時の政友会総裁犬養木堂氏に随行して渡支した⁽⁴⁾」。

殊に一九二九年孫文の移柩祭に犬養が招かれた際に清水が同行したことは、彼が連盟を発足させる契機となった。清水は設立経緯を述べた文の中で、上海市長張群によって開かれた歓迎会の席上「木堂先生の挨拶中、孫中山と自分分は東亜の大局に付て共同の目的を有し、共通の境遇にあつたため自然深き交りを訂し、互に力になりあつた云々の辞」に刺激されたと述べている⁽⁵⁾。周知のように犬養と孫文の関係は、明治末年に孫文が日本に亡命して以来、頭山満や大陸浪人とともに革命派を支援したことに由来する。

清水は、犬養のアジア主義に共鳴して連盟を発起することを発想した。「亜細亜」は中国にとどまらず、インド、中近東まで及んだ。「日志両国のみとは云はず、印度も暹羅も安南も比律賓もアフガニスタン、ペルシヤ、トルコ、アラビヤも全部亜細亜に国をなすものは、共通の目的を有つ事に想到すれば、日本の使命が真に重大であることを痛感する、先生に随行した事によりて、一大啓発の機会を与へられ、爾来自分の脳裏を往来して止まなかつたのは実に此の問題である」と清水は述べている。

清水は関西を中心に犬養の人脈をたどり、組織化をはかる。きっかけとなったのは犬養とも関係の深い大陸浪人・萱野長知との談話である。萱野は宮崎滔天、平山周らと革命評論社を設立し孫文を支援し、後には犬養首相の意を受けて、成功はしなかったが満州事変後の関係調整のために中国に向向いたことが知られている。⁽⁶⁾

連盟発足の直接の契機は清水の回想によれば、一九三〇年二月インド政府が関税引き上げを発表し、ガンディーが逮捕されることである。萱野との談話中、「殊に阪神両市のごとき毎年数億の通商取引を持続してゐながら、商取引以外は無理解無交渉であることは寧ろ不思議の沙汰」であるとして、「各種の気運を醸成すべき穩健なる一実体機関を大阪に創設する事」になった。

まず相島虚吼（相島勸次郎）に連絡をとり、協力を得ることになった。虚吼は大阪毎日新聞入社後副主幹、顧問などを務めた後、一九二二年国民党から立候補、当選した経歴を持っていた。⁽⁷⁾ 相島は、犬養系の人物であると同時に、在阪の新聞、財界に人脈を持つ人物であった。

さらに清水は犬養ともゆかりの深い内藤湖南と連絡をとった。⁽⁸⁾ 湖南は京都帝国大学文科大学にて東洋史講座を担任し、停年ののちは京都に隠棲していた。湖南は「世界最高にして最古の文化を有する印度を浅薄なる文化国たる英国が支配せる杯、之れ位ひ不合理なる事あるべきにあらず、早晚世界の此不合理は、合理に復するが当然である。印度さへ独立せば、他は風邪をのぞみて解決し得らるるべし、斯くて初めて日支の問題も真面目に解決を得られん」と英国のインド支配を批判して援助を約束し、会の名付け親ともなった。かつて大阪朝日に在籍したこともある著名な東洋学者湖南の参加は重みを持った。湖南は、東方文化連盟の創設に関与し、理事となる。

さらに、清水らは日本に帰化していたインド独立の運動家、ラス・ビハリ・ボースと連絡をとり、協力を得る。ボースは、一九一五年に日本に亡命した時に犬養、頭山滿らの援助を受けており、やはり犬養と関係のある人物で

あった。⁽⁹⁾ビハリ・ボースは神戸の貿易商でインド独立を志す、エ・エム・サハイを紹介する。サハイも東方文化連盟に参与した。ボースやサハイは、太平洋戦争期にかけて、日本政府や軍部との関係を深めてゆくことになる。⁽¹⁰⁾

また清水は大阪医科大学長を務めた佐多愛彦の協力も得た。大阪の医学界、大学関係を代表し財界に広い人脈を持つ佐多の協力も重要であった。⁽¹¹⁾

かくして東方文化連盟の発起に際しては、清水、湖南、佐多の三人が呼びかけ人となった。

しかし、連盟の発足は順調には進まなかった。中心人物として予定された相島は病が重く、彼の紹介による大阪商工会議所理事の高柳松一郎、大日本紡績連合会会長の阿部房次郎、日本綿花社長の喜多又蔵が連盟の中心となることを断つたためである。大阪財界が動かなかった理由の一つに、この時期の政治状況があったことが推測される。ちよūd、浜口雄幸、若槻礼次郎を首班とする民政党内閣の時期であり、この時期の大阪財界は同内閣と関係が深かった。⁽¹²⁾党勢拡張とは関係なかったとはいえ、政友会の代議士である清水の運動には、好都合な時期ではなかった。またアジア主義は幣原外交とも平仄が合わなかったであろう。

それでも、一九三一年に入ると清水・湖南・佐多を中心に、四月には第一回目の、六月には二回目の会合が開かれた。

四月の会合の案内状では、「東洋問題は帝国存立に関して重大なるものにして、殊に経済上に立脚して一層切実なるもの有之候、而も現状に顧みて如何の狀態に相成居るか、封支關係封印關係は更なり、其間露國の進出、亜米利加の策動等觀じ来れば正に帝國の大計を樹つべく、國民の覚悟をなすべきの秋と存じ候」と国際情勢への切迫感を表明している。

さらに満州事変が勃発すると状況は一変し、若槻内閣は動揺し同年一二月には政友会の犬養毅を首班とする内閣

が成立する。清水たちの運動に追い風が吹き始めていた。

このような政治状況の中で清水たちは、十一月九日、大阪倶楽部において創立委員会を開き、一二月一〇日発会式をひらくことにまでこぎ着ける。

追い風が吹いていたとはいえ、財界人の賛同を得ることができたのは、この連盟の政治色が薄められていたことによるだろう。会報各巻冒頭に掲げられている「東方文化聯盟設立の趣旨⁽¹³⁾」は次のように宣言している。

「支那は方に国家の自強とその統一に傾倒して日も足らざる活動を続けて居る、印度の独立の要求、洵に涙ぐまき切実なるものがある顧れば日露の対戦を転機として東亜の自覚を喚起し、正に光復の時代に入らんとする極めて大切な時に進みつゝある、而も光復の大事は東亜生民十億の固き結束を見ねば出来るものではない。

今や東方に生存する各国民が民族的に互に理解し合ふて東亜大局の共同目的に邁進することが最大急務である。而して亜細亜民族相互の理解と其親和を計るべきが本会の目的である。斯くして我等の希ふ所は人種平等権を確立して経済上共存共栄の実を挙ぐると共に人類全般の眞の向上と幸福の庶幾にあるは勿論である」。

「趣旨」の前半こそ盟主論的アジア主義の色彩を残しているが、後半はむしろ「亜細亜民族相互の理解と其親和を計る」などアジアとの交流に力点がある。

連盟がアジアとの通商を念頭に置いていたことは間違いない。事務局の戸田芳助主幹は、「正義の為の商戦を開始し、東部地中海以東を大阪商人によって占領し、全白人をしてその勝利を失はしむることは、まったく利益の為に唱へるのではない、大阪商人の正義感の満足のために提言するのである⁽¹⁴⁾」と高い調子で「商戦」を宣言している。

ただし、「亜細亜の奪回は木堂の晩年に残された最大の事業」と述べているように戸田自身は犬養系のやや癖のある言動をする人物であり、この一節は大阪財界へのアジテーションと理解するべきである。

むしろ時期は少し後になるが、大阪財界と深い交流のあった佐多の次の発言の方が連盟の真骨頂を示すと考えられる。「我々共の団体は、斯の如き半は政治上の累を受けるやうな形に非ずして、純真なる文化的親善の目的を實行したいと、そして殊に之を政治上の中心たる東京を避けて、国民経済の中心たる大阪にその本部を置きまして、さうしてその目的を達成したい、殊に大阪は、支那とは申すまでもなく、或いはインド、或いはその外の東方諸国とは寧ろ東京よりも、交渉の密接なところでありまして……国民の手を握らうとするのには、寧ろ東京よりも大阪が適當である」⁽¹⁵⁾。

政治的状況の厳しいときこそ大阪を中心にアジアとの交流により国民外交をはかる、これが連盟の中心人物の考えであった。

二 日中戦争までの活動

大阪財界への浸透

東方文化連盟の主な活動は、年一回の総会、国際交流、講演会、留学生支援を行い、機関誌を発刊することであった。一九三三年一月には財団法人化し事業計画を立て、一 東方文化の闡明、二 国民使節の交換、三 東方諸国に於ける文化の連絡、四 東方諸方視察団の交換並に留学生旅行者の誘致、五 東方諸民族内地居住者の保護事業と其他の支援を掲げている。⁽¹⁶⁾

連盟は数年の内に大阪財界へ深く浸透していった。会員数は、一九三二年末に二〇〇名、三三年末に三五〇名、

一九三四年末に五〇〇名、三五年末には八〇〇名と順調に伸びていた。⁽¹⁷⁾一九三六年末の評議員名簿には、阿部房次郎、稲畑勝太郎、野村徳七をはじめとして大阪財界を代表する人物の名が連ね、⁽¹⁸⁾「大抵の会社の課長級は連盟の会員となっている」と評されるほどであった。⁽¹⁹⁾

特に外交官やジャーナリスト、研究者などによる経験や見聞に基づいた講演・午餐会は、貿易を軸に広くアジアに関する知見を得、ネットワークを広げようとする大阪の聴衆の需要に応じるものであったと思われる。

一九三六年末の創立以来五カ年の活動を総括した清水は、中華民国三六名、インド人一〇名、ソ連人五名、満州国人四名、シヤム人一名を招請したと述べている。⁽²⁰⁾

中国、インドのほかにソ連関係が目につくが、これらは連盟の関心を示している。これらの国に関連する活動を見てゆく。

中国関係

満州事変後の日中関係は極度に悪化していた。前外相芳沢謙吉は、一九三二年一〇月に行われた連盟主催の講演において、日中関係悪化への危機感を表明しつつ、通商の重要性、その意味で「支那は日本にとって一番大切な国である」と説き、次のように東方文化連盟への期待を語っている。「一面に於ては日本は各国との通商貿易を盛んにすることを務め而してこの日本の財政経済といふものを回復して本筋に戻すといふことをしなければ私は日本の将来は非常に危険な観が致すのであります」。「差し当り東方諸国との関係を一層密接にし双方の諒解を遂げ進んで貿易の発展に貢献するといふことは誠に双手を挙げて賛成をせざるを得ないのであります蓋し之は日本の国是である」と考へるのであります。この意味に於きまして私は東方文化連盟の御目的の対し非常に共鳴する。⁽²¹⁾

東方文化連盟は、芳沢が期待したように民間レベルで中国との関係を密接にすべく、交流活動を行おうとした。特に清水は、日中双方で運動の支持者を募りたいと考えていた。だが、満州事変直後の日華関係は極めて悪化していたため、「支那の京阪神にある人々の加盟を得る」という清水の意図は実現しなかった。⁽²²⁾

それでも、塘沽停戦協定後、一九三三年九月、広田弘毅が外相に就任すると、日中関係は安定し始めた。中国共産党に危機感を強めた蒋介石の「安内攘外」政策と広田外交は呼応するかたちとなった。

この機を捉え、清水は、中華民国公使として来日した蔣作賓を萱野と共に訪れ、東方文化連盟の精神について語り、「同志の誘因を計らん」とした。蔣作賓は「之れ全く先年孫中山、木翁と手を握られ候主意に外ならずと悦ばれ候」と清水は伝えている。⁽²³⁾ 明治末年に日本留学経験のある蔣作賓と萱野を通して旧交を温めたのである。

しかし日中提携は簡単ではなかった。年末に清水たちは公使館を巻き込んで「日支交換会」を計画したが、実施直前に中国側から欠席が伝えられた。⁽²⁴⁾

日中関係の現実は一層厳しいものであった。一九三四年四月の外務省情報部長天羽英二の談話（天羽声明）は国際的に波紋を広げた。こうした情勢の中で同年五月に行われた在中華民國国特命全權公使・有吉明の講演は、中国政治情勢の複雑さ、依然として日中関係の「暗礁として残る」満州国の問題に言及している。⁽²⁵⁾

東方文化連盟の思想の普及を目指す清水は、一九三四年一〇月から約一月あまり満州、北支、上海と訪問し、帰国後顛末を報告した。この講演で、有吉公使や船津辰一郎在華紡績理事などが大アジア主義の評判が悪いことを理由に反対したのにもかかわらず、清水は上海市長・呉鉄城などと面会し、大アジア主義とは異なる連盟の思想について説いたことを報告している。また、中国は統一するだろうかと問い、「蒋介石が統一しては困る」と考える現地の日本人有力者の意見があることに懸念を示した。⁽²⁶⁾ 清水の中国統一化をめぐる問題意識は、有吉とともに論壇に

おける中国統一化論争の先駆けと言えるかも知れない。⁽²⁷⁾

ただし中国統一の支持といっても、満州は別であった。連盟の戸田主幹は、当初から「亜細亜主義の実現は実に満州国の独立を契機として更に大なる一步を踏み出したのである」⁽²⁸⁾と説き、湖南は「日満文化協会」を推進して⁽²⁹⁾た。理事の一人である栗本は「満蒙開発及び大亜細亜主義の国民的理想の統一結成に就て」⁽³⁰⁾において満蒙開発の意義を説いていた。さらに三四年後半には満州国は日中関係の障害にならないという認識が広がりつつあった。北平を飛行機で訪問した神尾朝日新聞東亜部長・理事は、一九三四年一月の講演で「矢張り満州は満州として支那本土から切り抜けて独立させるんだということが段々と明らかになって参りました、その結果は従来の排日宣伝は非常に其力を失った」と述べている。⁽³¹⁾一九三五年一月には満州国民生部大臣・臧式毅らによる講演午餐会が、⁽³²⁾同年三月には、加藤完治らによる満州移民に関する講演午餐会が催されている。⁽³³⁾

その後一九三五年五月には、日中両国が大使館を昇格させ、有吉と蔣作賓が初代大使となった。日中関係は一歩前進したかに見えた。東方文化連盟では、有吉が駐華全権大使として「日華親善は文化提携から」と題する講演を、駐日中華民国大使となった蔣作賓が「大阪の隆昌は儒教文化から」と題する講演を行い、ともに「文化」による日中提携を強調した。⁽³⁴⁾

だがそれ以後の展開は清水の懸念が現実化するものであった。陸軍の圧力により華北分離工作が進み、同年一月には冀東防共自治委員会、一二月に冀察政務委員会が成立すると、日中関係は暗転する。同年末の「会務報告」において清水は、東方文化連盟の会員数の着実な増加の一方で、日支関係については「東方文化連盟がその使命として居ります国民外交が未だ徹底致して居らぬ」と報告した。⁽³⁵⁾

清水は、大アジア主義、アジア盟主論的な考えを嫌い、武断的大陸政策にも批判的であった。彼の徹底した立場

は東方文化連盟の中でも際立っていたが、大阪財界にもその基盤はあった。

一九三六年九月、上海駐在総領事であった石射猪太郎が駐羅特命全権公使としてタイに赴任する際に、大阪商工会議所、大日本紡績連合会と共同主催で東方文化連盟が歓送会と講演会を行っている⁽³⁶⁾。石井は、蒋介石が日中関係調整の意思を持っているのに対して、「軌道を外れた考をしてゐるのは寧ろ此方ぢやないか、日本側ぢやないか」と日本の大陸政策を批判する発言をした。講演の後大阪商工会議所副会頭・大阪工業会会長であり連盟の評議員でもある片岡安は、「殊に最近冀東政権以来我国の支那に対する外交は益々難渋を極め、この難渋を極めた結果が我国に多大の損害を及すんではないかと、この機会に我々当局を鞭撻するといつては甚だ相済みぬのでありますが、当局のやり方に何等かの是正を加へるやうなことをお互いに研究して、将来の支那の外交関係に過なからしめんやうにしなければならぬことではないかといふ感を非常に強くしたのであります」と日中関係の悪化を招いた政策を批判し、石井の発言に応じている。

もつとも、このような大陸政策批判が大阪財界の支配的見解であったとは言えないであろう。華北分離工作に便乗するかのようには、大阪商工会議所や実業組合連合会は早速華北に慰問・調査団を派遣していた⁽³⁷⁾。連盟でも栗本は、華北分離工作を前提に「日滿支経済ブロック」について論じている⁽³⁸⁾。

中国では幣制改革後統一化の基盤が作られ、一九三六年一二月には西安事件が起こり、抗日と第二次国共合作への動きが強化される。日中関係がさらに厳しいものになるなかで、日本では林銑十郎内閣の外相佐藤尚武や陸軍参謀本部第一部長の石原莞爾らによる外交、大陸政策の見直しをはかる動きも一方にあった。十分な成果はあげられなかったが、一九三七年三月には、日華貿易協会会長児玉謙次を団長とする使節が中国に送られている⁽³⁹⁾。

悪化する日中関係のなかで、東方文化連盟は大使、領事やジャーナリストを招待し講演会を開催するなど「国民

外交」につとめた。

一九三七年に入つて、神戸から訪中経済使節団を率いて出発する児玉謙次、油谷恭一の歓送会を連盟は行つてゐる。さらに三月には中央通訊社東京特派員の陳博生を招待して講演会を開き、四月には北平記者団歓迎会を催してゐる。⁽⁴⁰⁾ 陳博生は、日本への留学経験があり、戦時期には重慶の「中央日報」社長に起用される国民党系の大物ジャーナリストであつた。⁽⁴¹⁾

だが日中交流の場として設定された陳博生を囲む座談会でも、認識の亀裂が浮かび上がるようになっていた。⁽⁴²⁾ この座談会では、陳博生が「日本は先づ領土に対して侵略といふ心がない、それから支那の主権に対して損害する意思がないといふこと」を行動によって示してもらいたいと述べたのに対し、長岡克暁・大阪毎日新聞社東亜通信部長は、中国が英米に経済的特権を与えることが日中間の政治問題になると論じ、また「支那自力に依つてソヴェトの勢力を防ぎ得るんだ」ということを事実で示せば「領土的野心といふものも、持つに至つた原因がなくなる」と応じている。末広理事も「或る程度以上に大陸政策をやるのは不賛成」だが、日本が華北から撤退したらソビエトが入ってくるのではないかと懸念を示している。両者はまず相手に行動を求めた。末広は「逆も見込みがないとして投出してしまつては駄目で、飽迄もお互が提携して日支関係の改善を図らなければならない」とまとめたが、亀裂はかなり大きくなつていた。

準戦時体制期には日中連携を図る清水の活動基盤は狭まつていた。

インド関係など

インドに関する講演や交流は、連盟が中国について力を入れた問題であつた。

『会報』『会誌』の誌面には、連盟創立時から関与しているビハリ・ボースやサハイが「印度志士」として登場し、白色人種や西洋による有色人種、東洋の支配を糾弾した。たとえば、ボースは「文明の母亜細亜」⁽⁴³⁾、「通商時象から見た文化の差異」⁽⁴⁴⁾、「東洋の国家主義と西洋の国家主義」⁽⁴⁵⁾、「有色人種の崛起と白色人種の衰微」⁽⁴⁶⁾などを講演または執筆している。サハイも「オリエンタル、カルチュア、リーグ（英文）」⁽⁴⁷⁾、「亜細亜問題（英文）」⁽⁴⁸⁾、「印度に於ける仏教の現状」⁽⁴⁹⁾、「満州国及比率賓の独立と亜細亜」⁽⁵⁰⁾などを講演または執筆した。特に神戸の貿易商であるサハイは、理事にはなっていないが、各種活動に精力的に参加していた。

東亞連盟としては、一九三三年四月にイギリス政府が日本・インド通商条約廃棄通告を通告したことによる通商紛争に対する対応が目立つ。

朝日新聞後援のもとに日印問題講演会が四月に開かれ、栗本、伊藤竹之助、サハイ、カプールらによる講演が偲なわれた。五月には「ガンディー翁が印度の不触民族の平等待遇実現を祈願して断食行を刊行した」ことに「感謝の電報」を送っている⁽⁵¹⁾。

清水、佐多、村田、末広の各理事の外にサハイが出席した連盟の理事会は、「印度の少数産業支配者が産業保障法を拡大強化して日貨を防遏せんとするは、数層高き消費税を三億五千万円消費税を三億五千万円民衆に課するの結果となり、さなきだに印度国庫収入の七〇%以上が関税及消費税と云ふ、無比の悪税制下に喘ぎつつある民衆を致命的に重圧するものである」と声明書を発した。この関税引き上げはむしろインド民衆を苦しめるものであると論じた声明書は、『大阪朝日新聞』⁽⁵²⁾にも援用され、注目を浴びた。

だが、この声明書は、英国に対して「互譲協定」の締結を希望し攻撃的なものではない。声明書は、「会商に互譲協定ありとすれば必ずや、此の基礎による相互の末長き将来性と合致する所に依存すると信じる」と論じている⁽⁵³⁾。

その外、インドの災害への義援金募集や文化交流など連盟の趣旨通りの活動も多い。またインド以外でもシヤムや日蘭会商に関する講演、西アジアの情勢など広くアジアの文物、情勢の紹介が行われている。

東方文化連盟は、英国の印度支配を糾弾しアジアの解放を叫ぶ「インド志士」との密接な関係を持ち、日英の通商紛争に敏感に反応した。だが他方で紛争の「互譲協定」を望んでおり、幅広く文化などの交流に力点を置いていた。

ロシア関係

東方文化連盟は、一時期日露関係にも通商促進の観点から興味を示した。

日露関係は、満州事変後緊迫の度合いを強めていたが、広田外相の下で、北満鉄道の満州国への譲渡交渉が進行した。一九三五年一月には、北満鉄道譲渡に関する満州・ソ連両国の協定が成立する。

これを契機に、駐日ソ連大使・ユーレネフによる講演「北鉄委譲が齎らす画期的効果」⁽⁵⁴⁾がなされ、また中ソ大使・太田為吉による講演「蘇国内外情勢と日蘇経済提携」が行われる。太田は日露関係の緩和、通商促進の余地があることを強調した。さらに連盟では、大大阪毎日のモスクワ駐在員をしていた小林英生の講演や「ロシア」事情座談会を行って⁽⁵⁵⁾いる。

この背景には、大阪財界におけるソビエトロシアとの通商拡大への期待があつた。⁽⁵⁶⁾理事の岩井は社会主義国との貿易に商機ありと見、鉄工業を営む栗本は銑鉄の輸入、鉄製品の輸出を期待した。そこでソ連経済使節団派遣の計画がなされた。

しかし陸軍の横やりが入り、この計画は挫折する。大阪・第四師団司令部外事課主任・川口大佐の依頼により、

六月二一日、参謀本部ロシア班長・神田正種の講演が開かれ、日露貿易への期待に冷や水を浴びせた。即ち神田大佐は、「太田駐露大使の親露説に一撃を与へて、大阪商人はロシアでなく支那の民衆と経済関係を結んで東洋人のブロックをつくれと叫んだので、神戸の毛織物輸出商なる印度のサハイが壇下から拍手をおくった」⁽⁵⁷⁾。

日露通商への期待は、軍事政治情勢の壁を乗り越えることは出来なかった。「反共」の潮流は、一九三六年一月の日独防共協定調印に至る。

大アジア主義との距離

満州事変後、アジア主義的潮流は強まっていた。このような時代に「東方文化連盟」のアジア主義はどのような位置を占めたのか、大亜細亞協会との比較において考察する。

大亜細亞協会は、一九三三年四月、連盟脱退を契機に「亜細亞の再建と秩序化の重責は、職として皇国日本の双肩にかかる」として、松井石根、近衛文麿、広田弘毅ら有力な政治家、軍人を創立メンバーとして設立された。最近の研究は、同協会を「大東亜共栄圏」に至る道をイデオロギー的に形作った組織として重視している。⁽⁵⁸⁾

確かに大亜細亞協会設立に関与した矢野仁一、鹿子木員信らは東方文化連盟の評議員でもあり、両者は一部メンバーシップが重複している。だが、清水をはじめとする主要メンバーは、大アジア主義とは異なる考えを持っている。

一九三六年、大亜細亞協会の松井大将らが来阪し、講演会を開いた。この動きに対して「アジア主義運動 健全なる発達と大阪の役割」(『大阪朝日新聞』一九三六年五月二一日)は「大阪には東方文化聯盟があつて、アジア諸民族の文化的提携を策し、これによって各民族間の親善を計り、ひいて世界人類の平和と幸福の増進に寄与しよう

とする目的で、昭和六年創立されて以来、緩慢ながら徐々に発達を遂げつつあり、アジア主義運動の平和的な且つ実際のな第一声はまず大阪から掲げられた観がある」と大阪がアジア主義の第一声をあげたことを指摘する。また記事は大亜細亜協会との違いを念頭に、次のように述べている。

「わが大阪はいうまでもなく産業日本の中心地であり、貿易躍進の策根地である。随って大阪人の眼界は、支那はもとより南洋、インド、アフリカにおよび、今では世界的制覇を目指している関係上、必ずしもアジアの一角に踞踏たるものではない。アジア主義の運動が大阪において共鳴を得そうでは必ずしもそうでないのは、大阪人の眼界がすでにアジアの天地を超えて世界的に拡大されたことを語るものではあるまいか。しかし大阪人のこの傾向は、アジア主義運動者にとって失望の原因となるものではなく、吾人の見解によれば、大阪人のこの傾向を通じて該運動は強化され、国際的に普遍化されることによって、アジア主義運動の前途に却て光明を齎らすものであろうことを信じ、それに多大の期待をもつものである」。

この記事は、大阪を中心とする貿易がアジアを越えて「世界的制覇」を目指しており、狭いアジアに盤踞するものではないこと、むしろアジア主義の国際的「普遍化」を目指すものであることを強調している。大阪朝日の有力記者が連盟の理事を務めていることを考慮すると、連盟の平和主義的性格を内部から擁護した記事と言えるだろう。それでも、東方文化連盟が大アジア主義と同一視される傾向があったことに、清水は次のように述べて反発している。⁽⁵⁹⁾「何かの雑誌で、東方文化連盟の志す所、所謂大アジア主義者の唱ふるものや、軍部一部のイデオロギーや外務次官等と同じものである様に書かれてあったが、自分は所謂軍部一部のイデオロギーなるものを熟知知らない

と共に、大亜細亞主義者の唱ふる所や、重光氏の抱懐せる特異なるものであるや分らないが、もし亜細亞主義に立つと云ひ条、亜細亞に号令する意味を以ての、所謂亜細亞の盟主を以て任じたり、問題を我れの優越なる力のみよりて解決せんとするにありとせば、我等の主張と根本に於て相違があるのである」。清水は、東方文化連盟の志が、軍部や大アジア主義、重光葵外務次官とは無関係であり、アジア盟主論や軍事力による問題解決への志向とは根本的に異なっていることを明確に述べている。

もつとも日中戦争前になると連盟内にも、清水が強調する連盟の主張とは異なつた考えが目立つてくる。

たとえば一九三六年一二月に新聞関係者と清水らの匿名座談会⁶⁰でも食い違いがうかがえる。日独防共協定の背景に現状維持に対する現状打破勢力の台頭があるととらえ、後者に与するのもしよとする意見がみられる。これに対して清水とおぼしき発言者は、ドイツの現状打破は英仏米にとつてかわらうというのに過ぎず、「我々は支那を反対側に廻すといふことは非常に損害がある」と述べている。これに対して、防共協定が中国を敵側においやるとは限らないという発言もみられる。

「立憲主義、自由主義で来た我々」と述べる人物のファシズムへの警戒と必ずしもそうではない意見の食い違いが、ここでは見られる。ナチスの台頭とアジア情勢への関連が問われ、同時にパワーポリティックスの論理が顔を出している。

三 日中戦争期の活動

一九三七年七月の盧溝橋事件以後の情勢は、穏健なアジア主義ともいふべき連盟の方向性に变化をもたらず。

前提として、創設以来の理事が死去していた。内藤湖南が一九三四年六月、岩井勝次郎が一九三五年一二月、清

水が一九三七年四月に死去した。特に清水の死去は、決定的な意味を持つことになったと思われる。

それでも連盟には、中国との関係悪化に対する懸念があった。連盟の日中戦争への対応と大東亜共栄圏への道を検討する。

盧溝橋事件後の情勢への反応

盧溝橋事件直後の大阪商工会議所の決議などには「対支膺懲」など強硬な文言が見られるように強硬論一辺倒になる。⁽⁶¹⁾

しかし東方文化連盟の講演会での雰囲気は少し異なり、日中関係について不安感がただよっていた。

一九三七年一〇月、創設期の理事で大阪毎日満州北支通信総局長・檜崎観一の講演会が開かれ、多数の聴衆を集めた。この時開会の辞を述べた末広理事は、事変の見通しに言及し「支那を徹底的にやっつけ」た場合、戦意を失わせるかも知れないが、「排日抗日といふようなことは一層甚だしくなるのではなからうか」、「我が国と支那の関係は或いは一八七一年以来の独仏両国、戦後の独仏関係のやうになるぢやあるまいか」と懸念を示した。檜崎も、「将来日支の関係を独仏の関係にしたくないという我々の念願」を表明しつつ、日本政府の決心は不明であり、現地に引きずられているという懸念を表明している。⁽⁶²⁾

この講演会に多くの聴衆が集まったことから、「事変」の先行き、日中対立が長期化することへの不安感を抱く人々も相当数いたことをうかがわせる。

神尾茂と汪兆銘工作

不安が的中して日中戦争が拡大してゆく中において、東方文化連盟はあまり活動ができていない。この間、軍部は傀儡政権を作り出し、一九三七年二月に中華民国臨時政府、一九三八年三月に中華民国維新政府をさせた。

一九三九年の一二月の八周年記念の講演会には、中華民国臨時政府の顧問を辞したばかりの湯沢三千男が招待されて中国情勢について講演を行っている。内務官僚でやがて大日本産業報国会理事長、東条内閣下で内務次官となる湯沢も、大阪では日中関係に関して厳しい認識を示した。湯沢は、「第一に支那人は日本人が嫌ひである。徹底的な反対であると共に和平派の人も帰るところ抗日派と同一の気持を持つてゐるといふこと、第二は和平派も抗日派も愛国の至情から事をやってゐるといふことを考へねばならぬこと、第三は日本の言ふことを全然信用してゐない、この三点を基礎判断の前提」としなければならぬと述べている。司会の佐多が「今日の話ほど深刻な声を聞いたことはない」と感想を述べるほど、湯沢は中国では日本人の信用が失われていると明確に述べたのである。⁽⁶³⁾

さらに日中関係に関する連盟の活動で、目を惹くのは、神尾茂の講演である。東方文化連盟理事でもあった神尾は、大阪朝日から東京朝日に論説委員として転任した後香港に派遣され、宇垣一成外相下の和平工作、さらに汪兆銘工作に関与した。⁽⁶⁴⁾

一九三八年一二月重慶を脱出し対日本和平声明を行った汪兆銘と日本側との交渉がなされ、一九四〇年三月に汪兆銘は国民政府の南京遷都を宣言し、新中央政府成立が成立する。

新政府設立宣言直前の一九四〇年二月、東方文化連盟に招かれた神尾は汪兆銘との「和平運動」と新政権の樹立についての経緯に関する講演を行った。機密にわたる内容を含んだこの講演は聴衆の強い関心を惹き、神尾自身この講演会について「従来何人によつても語られなかつた事実に基づいて、日本のとるべき態度を示したので、来会者

二百名最後まで席を立つものがなかった」と日記に記したほど聴衆の関心を惹いた。⁽⁶⁶⁾

同年五月におなわれた神尾の講演では、陸軍の梅機関、民間有志、新聞記者と汪兆銘らの限られた人々で交渉が進められたこと、「之を拡大してゆけば必ずこの少数の人たちに成立った和平の精神といふものが、日支全国民に徹底してゆけるものだと、かういう精神を以て茲に漸く政府が現れ」と述べている。⁽⁶⁷⁾ 実際には汪兆銘工作は影佐禎昭に率いられた陸軍梅機関の手になる謀略的要素も含んだ複雑な運動であったが、ここではあくまでも「和平運動」として語られている。

東方文化連盟のアジア主義は、日中関係についていえば、紆余曲折を経て汪兆銘との「和平運動」に行き着いたと言つてもよいだろう。なおこの運動には「民間有志」として犬養の息子であり清水とも交友のあった犬養健が参加していたことも想起される。

大東亜共栄圏への道

一方日中戦争期には、東方文化連盟の紙面においても大東亜共栄圏への道が浮かび上がってくる。

まず日中戦争と反英、アジア復興の見通しを結びつけるという大アジア主義的論理が目につくようになる。

戸田芳助執筆と推定される『会誌』一二号の巻頭言は、「今回の支那事変は英蘇の極東攪乱の魔手を徹底的に芟除し東亜永久の平和を招来せんとするもの」「反英は我等が十年以来一貫した主義主張であつて亜細亜の解放が世界平和の唯一の基礎で、英魔が地中海以西に退却せざる限り世界に平和がない」などと事変の意義を「英魔」の追放に求めている。

またこの巻頭言は、当時流行のユダヤ陰謀説を展開し、「我等はこの黎明期に際して英米仏蘇の最高指揮命令権

を掌握する猶太財閥を完全に理解認識して彼等の動向を未然に察知し、世界和戦の決を左右する猶太黄金王に戒心と防備を怠つてはならぬ」と述べている。また戸田の司会によつて国際政経会理事・桜沢如一「世界を独裁する猶太財閥のグリンプス」⁽⁶⁸⁾、国際政経学会理事・若宮卯之助「時局と猶太人問題」⁽⁶⁹⁾などの講演会が開かれている。

もつとも戸田が広めようとしたユダヤ陰謀論は連盟の中では広がりをもつたようには思えない。だが連盟の催しは基本的には戦争の拡大に伴う政策に追隨してゆく。

インド関連の催しもさらに多くなるが、「回教民族」に関する講演会も登場するようになる。佐多の司会で行われた回教民族の国際対策講演会では、大日本回教協会理事長・松島肇らの講演が行われている⁽⁷⁰⁾。大日本回教協会は、陸軍大将林銑十郎が会長を務める占領地政策の一環として育成された政府系の研究機関であり、村田省蔵も関与していた⁽⁷¹⁾。佐多の司会は、あくまでもイスラム文化の紹介を旨としているが、占領地拡大にともなう政府の政策に追隨するものである。

そのほか東南アジア関係の催しも増えている。南進論者で大亜細亞協会のイデオログでもあるジャーナリスト・竹井十郎の講演なども行われている⁽⁷²⁾。これらは、大東亜共栄圏に至る道を踏み固めるものであるろう。

さらに日独伊三国軍事同盟を推進する大島浩がドイツ全権大使として一九四〇年七月に講演（「欧州の近状に就いて」）するようになる⁽⁷³⁾。大島はドイツ有利のヨーロッパ情勢を説き、最後に「日本が八紘一字の大精神に基き独逸と共に世界新秩序の建設に協力すると云ふ根本精神を定むれば日独の提携は成立する」、蘭印、仏印については「既にドイツが其所有者を征服しこらからしようとして居るのでありますから成るべく早くドイツに我が企画を告げ希望の達成に協力をせしむることが必要である」と述べている。司会の佐多は、「殊に大阪の如きはこれまで大體親英米依存の意見が今日尚随分多かるうと思」うが、（この講演が）「大阪の世論をこしらへる上に於て多大の動

機となることを確信」していると述べている。

「親英米依存の意見」を持つだろう大阪の聴衆に、ナチス・ドイツとの提携による南方進出を説く大島の講演が今後の指針となると説く佐多の言辞は、東方文化連盟も「大東亜戦争」まであと一歩というところまで来ていたことを示唆している。

おわりに

東方文化連盟は、犬養毅に師事する政友会の代議士清水銀蔵が、アジア主義的思想を現実化すべく、湖南や佐多などの協力を得て、大阪の財界、新聞界を背景に創設した団体であった。中国、インド、ソ連などと民間交流をほかり、アジア各地に関する講演会を開催する連盟の活動は大阪財界に浸透してゆく。

連盟の契機が強い清水のアジア主義は、盟主論的大アジア主義とは異なっていた。日本の大陸政策を批判する清水がリードする連盟の活動は、現実との緊張感をはらみ異彩をはなっている。

連盟は外交官の講演も多く催しているが、主導者はその独立性を自負した。佐多理事は、東京のアジア主義団体の多くは軍や政府の援助を受けているのに対し、東方文化連盟は独立して活動していると述べ、さらに「この国と国との交渉を、日本の斯の如き歴代無能家なる、外交官に放任して、国家の前途は如何なることになるか」と言い放っていた。

政治都市東京から離れた経済貿易都市大阪で本来の国民外交を行うという清水や佐多の自負は、日中戦争がはじまるまでは意味を持った。

しかし、日中戦争期の活動を考慮に入れるならば、この独立性の自負は過大な自己評価だったと言えるだろう。

清水の死後、日中戦争がはじまると連盟の活動はしだいに変質してゆき、時局に追隨し大東亜共栄圏への道を歩むことになった。

- (1) 陶徳民「内藤湖南と東方文化連盟 昭和初期におけるアジア主義の一形態」『東アジア文化交渉研究』別冊三一―一八、二〇〇八年。
- (2) 松浦正孝「大東亜戦争」はなぜ起きたのか 汎アジア主義の政治経済史』名古屋大学出版会、二〇一〇年。特に連盟理事でもある村田省蔵については、半沢健市(二〇〇七)『財界人の戦争認識 村田省蔵の大東亜戦争』(神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議、王宗瑜(二〇〇七)「村田省蔵に関する一考察——その中国認識を中心に」中央大学大学院研究年報三七号、松浦正孝(二〇一七)「村田省蔵と実業アジア主義」黄自進ほか編『日中戦争』とは何だったのか』ミネルヴァ書房、参照。
- (3) 規約、理事、評議員は『会報』第一号、巻頭に記載のもの。
- (4) 「立憲政友会滋賀県支部長 清水銀蔵氏」滋賀日出新聞社経済部編『天津市人物名鑑』滋賀日出新聞社、一九三六年、一二二頁。「清水銀蔵」『政治家人名事典』日外アソシエーツ、一九九〇年、二六二頁なども参照。
- (5) 清水銀蔵「東方文化連盟会報設立に至るまでの経過」『会報』第一号、一九三二年、一頁。蒋介石が主催した移樞祭に犬養と頭山満が招かれ、古島一雄、萱野長知、犬養健、なども同行した(清水銀蔵「木堂先生随遊記」『木堂雜誌』第六卷九号、一九二八年、五―二五頁。犬養木堂先生伝記刊行会編『犬養木堂伝 中巻』東洋経済新報社、一八三九年、七四二―七六七頁にも再録)。
- (6) 崎村義郎(久保田文次編)『萱野長知研究』高知市民図書館、一九九六年、二一五―二二八頁など参照。
- (7) 「相島勘次郎」前掲『政治家人名事典』四頁参照
- (8) 湖南と犬養の交流については、前掲『犬養木堂伝 中巻』七七―七七二頁など参照。
- (9) 前掲『犬養木堂伝 中巻』七九七―八〇〇頁参照。
- (10) ビハリ・ボース、サハイの活動については、A・M・ナイル著(河合伸訳)『知られざるインド独立闘争 A・M・ナ

イル回想録』風涛社、一九八三年、中島岳志『中村屋のボース インド独立運動と近代日本のアジア主義』白水社、二〇〇五年など参照。

(11) 佐多が東方文化連盟に力を入れたことは、高梨光司『佐多愛彦先生伝』佐多愛彦先生古稀寿祝賀記念事業会、一九四〇年、六二二～六二六頁も参照。

(12) 拙稿『民政党内閣と大阪財界(一)(二)(三)——井上準之助と経済的自由主義——』『阪大法学』五七(四)二〇〇七年、同五八(五)二〇〇九年、同六二(二)二〇二二年など参照。

(13) 『会報』第一号、一九三二年所収。

(14) 戸田芳助『我觀東方文化連盟』『会報』第一号、一九三三年二月。

(15) 佐多愛彦『文化的親善運動の意義』『会誌』第一〇号、一九三七年五月、一五頁。

(16) 『財団法人東方文化連盟事業計画』『会誌』第三号、一九三三年二月、八八～八九頁。

(17) 清水銀蔵『会務報告』『会報』第七号、一九三六年一月、三六～三七頁参照。

(18) 『評議員』『会誌』第九号、一九三七年。

(19) 鈴木茂三郎『財界人物評論』改造社、一九三六年、二五四～二五八頁参照。

(20) 清水銀蔵『創立五周年を迎えるに当たりて』『会誌』第九号、一九三七年、五頁。

(21) 芳沢謙吉『雑感』『会報』第一号、一九三三年二月。

(22) 清水銀蔵から戸田芳助あて書簡『会務記事』『会報』第三号。

(23) 前掲、清水銀蔵から戸田芳助あて書簡参照。

(24) 清水銀蔵『挨拶』『会誌』第四号、一九三四年四月。

(25) 有吉明『中華民國の近状』『会誌』第四号、一九三四年七月参照。本講演は、日本経済連盟会でなされたものを特に参考すべきという理由でここに掲載されたものである。

(26) 清水銀蔵『滿支視察帰朝談』『会誌』第五号、一九三四年二月。

(27) 中国統一化論争に関しては、根岸智代『一九三〇年代半ば中国再認識をめぐる日本の論壇』『中央公論』誌を中心にして『現代中国研究』二〇一五年、七七～八二頁参照。なお同論文によれば有吉は、早い段階で中国が統一化しつつあると

いう認識を示していた。

- (28) 戸田前掲「我觀東方文化連盟」六九頁。
- (29) 岡村敬二『日滿文化協會の歴史 草創期を中心に』二〇〇六年、七四～七八頁参照。
- (30) 『会報』第一号、一九三二年二月。
- (31) 神尾茂「北平訪問飛行と最近支那の印象」『会誌』第五号、一九三四年二月。
- (32) 臧式毅「空談を排して現実へ」『会誌』第六号、一九三五年七月。
- (33) 「会務記事」『会誌』第六号。
- (34) 両講演とも『会誌』第六号、一九三五年七月所収。
- (35) 清水銀蔵「会務報告」『会誌』第七号、一九三六年一月。
- (36) 石射猪太郎「中国要人の対日態度の一考察」『会誌』第九号、一九三七年。
- (37) 「満州・北支視察座談会(一)」『大阪朝日新聞』一九三六年一〇月九日、大阪実業組合連合会編『満州北支視察記 皇軍慰問・産業調査』同、一九三六年参照。
- (38) 栗本勇之助「大陸政策の合理性と日滿支経済ブロックの結成」『会誌』第一〇号、一九三七年五月。
- (39) 使節団とその背景に関する最近の研究として、久保享「近代中国経済の変容と一九三〇年代」波多野澄雄ほか編『日中戦争はなぜ起きたのか 近代化をめぐる共鳴と衝突』中央公論新社、二〇一八年、一五二～一五七頁参照。
- (40) 「会務記事」『会誌』第一号、一九三七年。
- (41) 「陳博生」『岩波世界人名大辞典 CD-ROM版』岩波書店、二〇一四年。
- (42) 「陳博生氏を囲んでの座談」『会誌』第一号、一九三七年七月。
- (43) 『会報』第一号 一九三二年二月。
- (44) 『会報』第二号、一九三三年六月。
- (45) 『会誌』第四号、一九三四年四月。
- (46) 『会誌』第五号 一九三四年二月。
- (47) 『会報』第一号、一九三二年二月。

- (48) 『会誌』 第三号 一九三三年二月。
- (49) 『会誌』 第四号、一九三四年四月。
- (50) 『会誌』 第六号、一九三五年七月。
- (51) 『会務記事』 『会報』 第二号、七八〜八二頁。
- (52) 『大阪朝日新聞』 一九三三年四月二〇日。
- (53) 『会報』 第三号会務記事、一九三三年九月、八五頁。
- (54) 『会誌』 第六号、一九三五年七月。
- (55) 『会誌』 第八号、一九三六年七月。
- (56) 以下の記述は、鈴木前掲『財界人物評論』二五一〜二五九頁、清水銀蔵「謝辞」『会誌』 第八号、六二〜六三頁による。
- (57) 鈴木前掲『財界人物評論』二五五頁。同書では講演者は第四部課長の神田正梗となっているが、神田正種のことかと思われる。
- (58) 松浦前掲書、五〇四頁以下参照。
- (59) 清水銀蔵「東方文化聯盟の使命に付て」『会誌』 第七号、一九三六年、四八頁。
- (60) 「自由座談会 日独協定、対蘇対支外交問題」『会誌』 第九号、一九三七年。出席者は神尾茂、平川清風、松本鍵吉、三池亥佐夫、小林英生、清水銀蔵、戸田芳助。
- (61) 大阪商工会議所の事変初期の対応については、戦時中に刊行された大阪商工会議所編『大阪商工会議所史』 同前、一九四一年、三三三〜三三七頁が詳しい。
- (62) 檜崎観一「北支の将来」『会誌』 第一二二号、一九三八年一月。
- (63) 湯沢三千男「民心の把握が専要」『会誌』 第一六号、一九四〇年二月。
- (64) 神尾の和平工作への関与については、戸部良一『ピース・ファイター 支那事変和平工作の群像』 慶応義塾大学出版会、二〇〇六年、第五章参照。
- (65) 講演内容の掲載は不可とされたが、差し支えない範囲で、神尾茂「和平運動の本質と新政府の使命」『会誌』 第一七号、一九四〇年八月が掲載されている。

(66) 神尾茂『香港日記』神尾珠貴子、一九五七年、一九四〇年二月一四日の条、一八三頁。

(67) 神尾茂「汪先生伝言の二三」『会誌』第一七号、一九四〇年八月。

(68) 『会誌』第二二号、一九三八年一月。

(69) 『会誌』第一三三号、一九三八年七月。

(70) 『会誌』第一五号、一九三九年七月。

(71) 大日本回教協会については、島田大輔「昭和戦前期における回教政策に関する考察 大日本回教協会を中心に」『神教世界』六、二〇一五年、松浦前掲書第七章参照。

(72) 竹井十郎「蘭印の国際関係と東印度民族」『会誌』第一八号、一九四一年三月。竹井については、松浦正孝「日中情報宣伝戦争」同編『昭和・アジア主義の実像 帝国日本と台湾・「南洋」・「南支那」』ミネルヴァ書房、二〇〇七年、三七六～三七八頁参照。

(73) 『会誌』第一八号、一九四一年三月。

(74) 佐多前掲「文化的親善運動の意義」一六頁。

(資料) 東方文化聯盟会報 目次

東方文化聯盟会報 第一号 一九三二年一二月

東方文化聯盟会報設立に至るまでの経過：理事 清水銀蔵

文明の母亜細亜：印度志士 ラス・ビハリ・ボース

東亜の文化：サー・ハリシン・グール博士

芳沢前外相の講演：芳沢謙吉

満蒙開発及び大亜細亜主義の国民的理想の統一結成に就て：

栗本勇之介

精神文明の封揚：理事 岩井勝次郎

亜細亜聯盟に封する日本の使命：理事 末広重雄

何故ガンヂーは絶食したか 附印度に於ける英国の法規：印度志士 エ・エム・サハイ

オリエンタル、カルチュア、リーグ(英文)：エ・エム・サハイ

我觀東方文化聯盟：戸田芳助

漫言一束：黎仙生

会告：

編輯後記：

東方文化聯盟会報 第二号 一九三三年六月

東方文化聯盟に關する鄙見：理事 内藤席次郎

變り行く印度：前カルカッタ総領事 酒匂秀一

日支親善に就て：駐支公使 有吉明

東洋文化について：同一等書記官 須磨弥吉郎

人種関税の両差別を撤廃すべし：理事 岩井勝次郎

大英帝国の姿を見よ：伊藤忠商社会社専務取締役 伊藤竹之

介

東方文化聯盟の使命：清水銀蔵

志那百年の大計：細井肇

殖民帝国の苦闘：主幹 戸田芳助

通商時象から見た文化の差異：印度志士 アール・ビー・

ポース

随想漫言：黎仙生

会務記事、彙報：

東方文化聯盟会報 第三号 一九三三年二月

卷頭言：

日本文化と亜細亞觀：サア、ラルバイ、シヤマルダス

暹羅の国状と日暹關係：全權公使 矢田部保吉

亞細亞の解放と日本の立場：インド、タイムス社代表 チャ
マンラル

東亞政策の根本義：九州帝国大学法文学部長 鹿子木員信

亞細亞の恢復と日支の關係：理事 清水銀蔵

印度語に就て：全孟買日本人協會書記長 中川修吾

崇高なる精神文化の照顧：理事 岩井勝次郎

亞細亞問題（英文）：印度志士 エ、エム、サハイ

日貨の世界的進出は東方文化の捷利也：主幹 戸田芳助

縮想事象録：黎仙生

会務記事：

東方文化聯盟会誌 第四号 一九三四年四月

卷頭言：

日印会商の感想：大阪貿易館長 花岡芳夫

北支政權私見：理事 榊尾茂

東洋の国家主義と西洋の国家主義：印度志士 ラス・ビハ

リ・ポース

宗教的結合と無声の魅力：理事 岩井勝次郎

中華民國の近状：駐華全權公使 有吉明

載典仇著日本論を読む：大東方里

印度に於ける仏教の現状：印度志士 エ・エム・サハイ

非理法權天：主幹 戸田芳助

経済学は何処へ行く：黎仙生

内藤湖南博士を哀悼す：戸田芳助

緬想事象録：黎仙生

巻頭言：

中日の親善融和は個人的国民外交から：中国銀行大阪支店長
載克諧

満州国雑感：大阪毎日新聞主筆 高石真五郎

空談を排して実現へ：満州国民生部大臣 臧式毅

北鉄委譲が齎らす画期的効果：駐日サ聯大志 ユーレネフ

日華親善は文化提携から：駐華全權大使 有吉明

大阪の隆昌は儒教文化から：駐日中華民国大使 蔣作賓

満州国及比率賓の独立と亜細亜：印度志士 エ・エム・サハ

イ

『有色人種の怒涛』中の教節：

故内藤湖南翁追悼会：

一貫不変の国是：戸田黎仙

会務記事：

東方文化聯盟会誌 第七号 一九三六年一月

巻頭言：

蘇国内外情勢と日蘇経済提携：駐蘇全權大使 太田為吉

日貨進出の将来性は西亜に無くして支那印度にあり：特命全

權大使 松島肇

北支那の綿花：京都帝国大学農学部教授 榎本中衛

東方文化連盟の使命に付て：理事 清水銀蔵

岩井勝次郎氏を哀悼す：戸田芳助

東方文化聯盟会誌 第五号 一九三四年二月

巻頭言：

我国際通商上に於ける政治的文化的交渉：大阪毎日新聞副主

筆 下田将美

日蘭会商の経過と批判：日本蘭印貿易協会長・日蘭会商雜貨

業代表 有馬彦吉

太平洋問題と日蘭会商の真相：竹井十郎

北平訪問飛行と最近支那の印象：朝日新聞東亜部長・本連盟

理事 神尾茂

満州視察より帰りて：朝日新聞主筆 高原操

満支視察帰朝談：理事 清水銀蔵

内藤湖南翁を憶ふ：理事 清水銀蔵

有色人種の崛起と白色人種の衰微：印度志士 ラス・ピハ

リ・ボース

印度の理想と阿富汗人の実行力：木内久吾

初冬夜話：戸田黎仙

会務記事：

東方文化聯盟会誌 第六号 一九三五年七月

印度の文化一斑：木内久吾

松島大使の講演を聴きて：印度志士 エ・エム・サハイ

緬想事象録：戸田黎仙

留学生招致趣意書及留学生保導一般要領：

会務記事：

東方文化聯盟会誌 八号 一九三六年七月

卷頭言

印度に旅して：慶応大学教授 野口米次郎

北支各大学教授学生歓迎晩餐会

羅維国公使講演午餐会

道徳は根幹、科学は枝葉なり：駐日中華民国特命全權大使

許世英

任家豊氏・揚雪倫氏 歓迎迎会

日印文化交流午餐会

「ロシア」事情座談会

西阿弗利加海岸処女航海座談会

広東広西情勢座談会

会務記事

東方文化聯盟会誌 九号 一九三七年

卷頭言

創立五周年を迎えるに当たりて：理事 清水銀蔵

中国要人の対日態度の一考察：駐羅特命全權公使 石射猪太郎

五周年記念祝賀会開会辞：理事 佐多愛彦

欧米使節一班：元外相 吉沢謙吉

蘇連反幹部陰謀事件：大毎東亜部 小林英生

最近支那政情座談会：大毎東亜副部長 松本鐘吉

日独協定、対蘇対支外交問題座談会：神尾茂、平川清風、松本鐘吉、三池亥佐夫、小林英生、清水銀蔵、戸田芳助

会務記事

東方文化聯盟会誌 第一〇号（創立五周年記念臨時特集 日

支関係打開号）一九三七年五月

序文

清水銀蔵君の急逝を哀悼す：戸田芳助

東方文化連盟の使命：理事 清水銀蔵

文化的親善運動の意義：理事・医学博士 佐多愛彦

大陸政策の合理性と日滿支経済プロックの結成：理事 栗本

勇之助

サハイ君紹介の辞：法学博士・末広重雄

世界平和と東洋文化：印度志士 エ・エム・サハイ

紹介辞：司会者 戸田芳助

我国今日の状況：中央通訊社東京特派員 陳博生

我国の日本に対する希望：同 陳博生

支那が廃棄を要求する不平等条約とは何ぞや：理事・法学博士 末広重雄

仏教を通じて見たる日華提携：日華仏教研究会長 林彦明
亜細亜思想の下に：関西日印協合理事 小林義道
对支漫言：戸田芳助

東方文化聯盟会誌 第一一号 一九三七年七月
卷頭言

野生司画伯歓迎午餐会：理事 佐多愛彦
丹精途上予想外の苦心：野生司香雪
陳博生氏招請講演午餐会：佐多愛彦

先提は相互信頼：中国通訊社特派員 陳博生
印度商務官及觀光団歓迎午餐会
着任第一印象：商務官 サクセナ 通訳 エ・エム・サハイ

答辞：觀光団長 エム・エル・ヴァヤス
陳博生氏を囲んでの座談
弔辞：理事 佐多愛彦

弔詞：印度志士 エ・エム・サハイ
印度教と仏教
印度からのニュース・レター

北支問題：黎仙生
東方文化聯盟会誌 第二二号 一九三八年一月

卷頭言
北支の将来：大毎満洲北支通信総局長 檜崎観一

对支文化施設の根本要素：上海自然科学研究所長 新城新藏
故清水理事追悼会挨拶：理事 佐多愛彦
追悼辞：通信参与官・代議士 犬養健

日支事変に就いて：東亜同文書院長 大内暢三
世界を独裁する猶太財閥のグリンプス：国際政経会・理事
桜沢如一

会務記事
東方文化聯盟会誌 第一三号 一九三八年七月
卷頭言

英国の伝統政策と最近の印度事情：印度志士 エ・エム・サハイ
和蘭の国民性について：台湾帝国大学・教授 浅井惠倫

南方情勢と南方人の声：南方情勢社主幹 竹井十郎
第三国人の支那事変観：前フイリピン総督顧問 ピーター・ダブリュー・リーヴス

時局と猶太人問題：国際政経学会・理事 若宮卯之助
世界回教徒の動向：須田真継

特別付録
大公が黄河治水事業に就て：渡辺金三

東方文化聯盟会誌 第一四号 一九三九年二月

卷頭言

第三国人としての支那事変観：印度志士 エ・エム・サハイ
逸の近状：理事 佐々木駒之助

国亡ぶれと文化は征服されず：イデル・ウラル・トルコタタル・文化協会神戸支部副支部長 カヂス・アリ
アラビア中心の防共協定締結を望む：アラビヤ代表 エム・マキー・タシカンデー

信教の自由は我が国独特の容認：貴族院議員 稲畑勝太郎
文化提携以外に真の親善なし：貴族院議員・理事 森平兵衛
思想戦である限り百年戦争も辞せず：朝日新聞・名誉主幹 高原操

慈眼愛敵は日本人の特性：京大名誉教授・理事 末広重雄
蓄積した東方文化の再放射：印度志士 エ・エム・サハイ
近衛声明と汪兆銘声明：

緬想余祿：黎仙生
会務記事

東方文化聯盟会誌 第一五号 一九三九年七月

卷頭言

回教民族の国際対策講演会

開会の辞：理事 佐多 愛彦

挨拶：大日本回教協会理事長 松島肇

回教事情：同調査部長 匝嗟胤次

回教対策：同総務部長 松村孝良

印度観光団歓迎会

開会の辞：理事 佐多愛彦

欧米式外装に包まれた日本精神：日本視察団長 ジョージ
日本の精神的支援下に「東洋人の東洋」の復興：ユーナイ
テットプレス社代表 ビー・ジー・シヤルマ
サハイ氏著「印度」読後感：戸田黎仙

印度人英語の使用の弁
「白人を敵として」の読後感：玉倉宇多
会務記事

東方文化聯盟会誌 第一六号 一九四〇年二月

平川清風君の逝去を哀悼す

卷頭言

印度事情講演会

開会の辞：佐多愛彦

東洋第三国民族として中国の朝野に懇ぶ：印度志士 A・

Mサハイ

事変前後の印度事情と英国の逆宣伝：哲学博士 滝照道

ザカリヤ氏講演会

挨拶：佐多愛彦

今度は欺かれない：前カルカッタ市長 エー・ケー・ザカ

リヤ

定時総会及び講演会

開会の辞：佐多愛彦

民心の把握が専要：前北支那政府行政顧問 湯沢三千男
会務記事

東方文化聯盟会誌 第一七号 一九四〇年八月

巻頭言

神尾茂氏講演会

開会の辞：理事 佐田愛彦

和平運動の本質と新政府の使命：東京朝日論説委員・東方

文化連盟理事 神尾茂

閉会の辞：佐田愛彦

三谷、神尾両氏講演会

挨拶：理事 佐多愛彦

外務省文化事業に就て：外務省文化事業部長 三谷隆信

汪先生伝言の二三……神尾茂

会務記事

会員の訃報

東方文化聯盟会誌 第一八号 一九四一年三月

巻頭言

大島前大使午餐会

開会の辞：理事 佐多愛彦

欧州の近状に就いて：駐独全権大使 大島浩

謝辞：理事 佐多愛彦

竹井氏講演午餐会

開会の辞 佐多愛彦

蘭印の国際関係と東印度民族：竹井十郎

神尾氏午餐会

開会の辞：理事 佐多愛彦

三国同盟と支那事変処理：同 神尾茂

挨拶：同 佐多愛彦

森正蔵氏講演会

開会の辞：佐多愛彦

蘇連の内外事情と列国の情勢：東京日日新聞ロシア課長

森正蔵

会務記事

東方文化聯盟会誌 第一九号 一九四一年一〇月

巻頭言

穂積三雄、高岡大輔氏講演午餐会

挨拶：理事 佐多愛彦

仏印・泰見聞の二三：大毎経済部長 穂積三雄

誤った印度観を是正せよ：衆議院議員 高岡大輔

田中長三郎博士講演午餐会

挨拶：理事 佐多愛彦

会務記事

大東亜共栄圏と植物資源：農学博士 田中長二郎

挨拶：理事 栗本勇之助

挨拶：佐多愛彦

カマラ・デヴィ女史歓迎講演会

開会の辞：理事 佐多愛彦

紹介：印度志士 エー・エム・サハイ

物心両面の東方文化と新印度の使命：カマラ・デヴィ

閉会の辞：佐多愛彦

本研究は、JSPS科研費 17K03539の成果の一部である。